

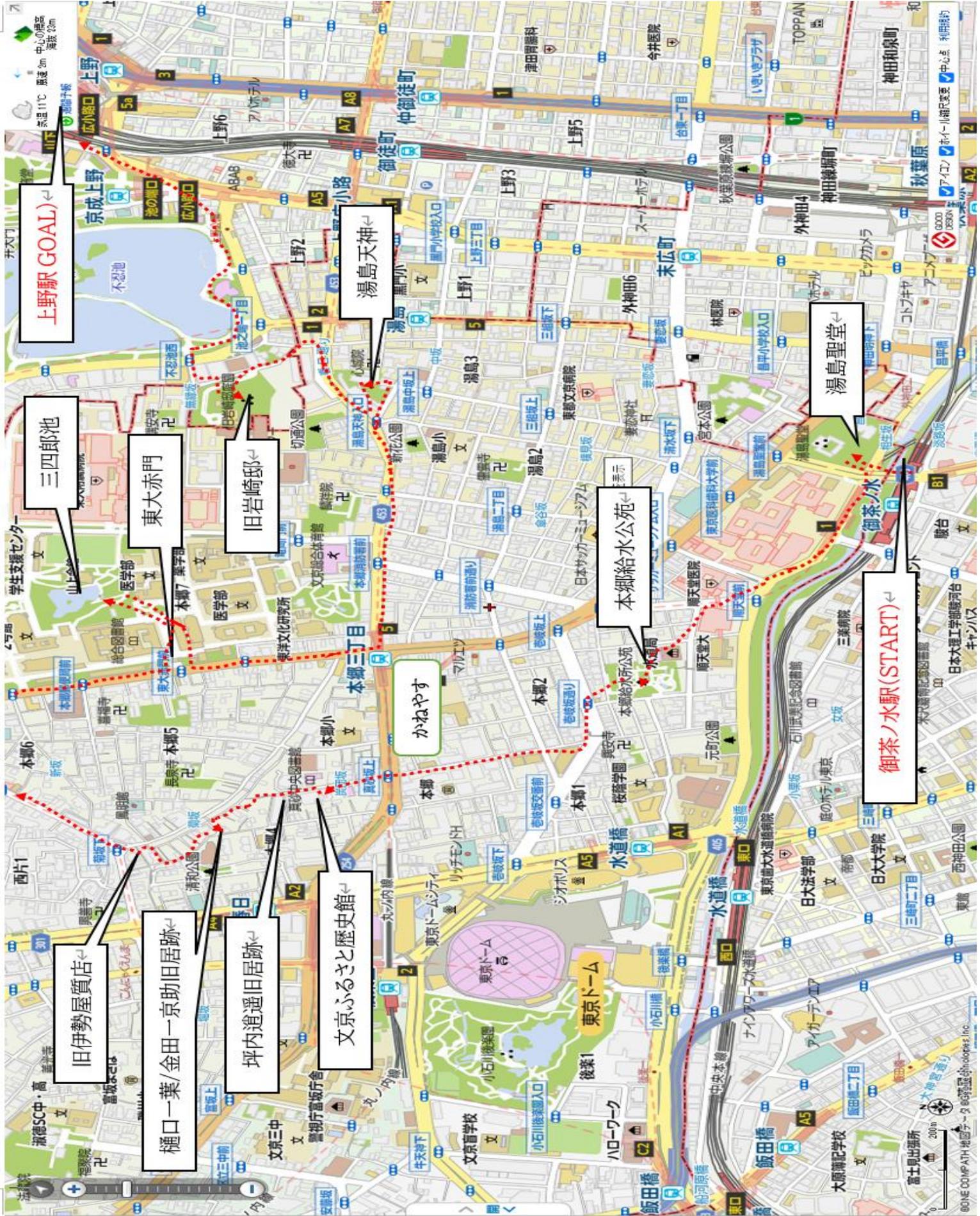
# ぐるっと本郷

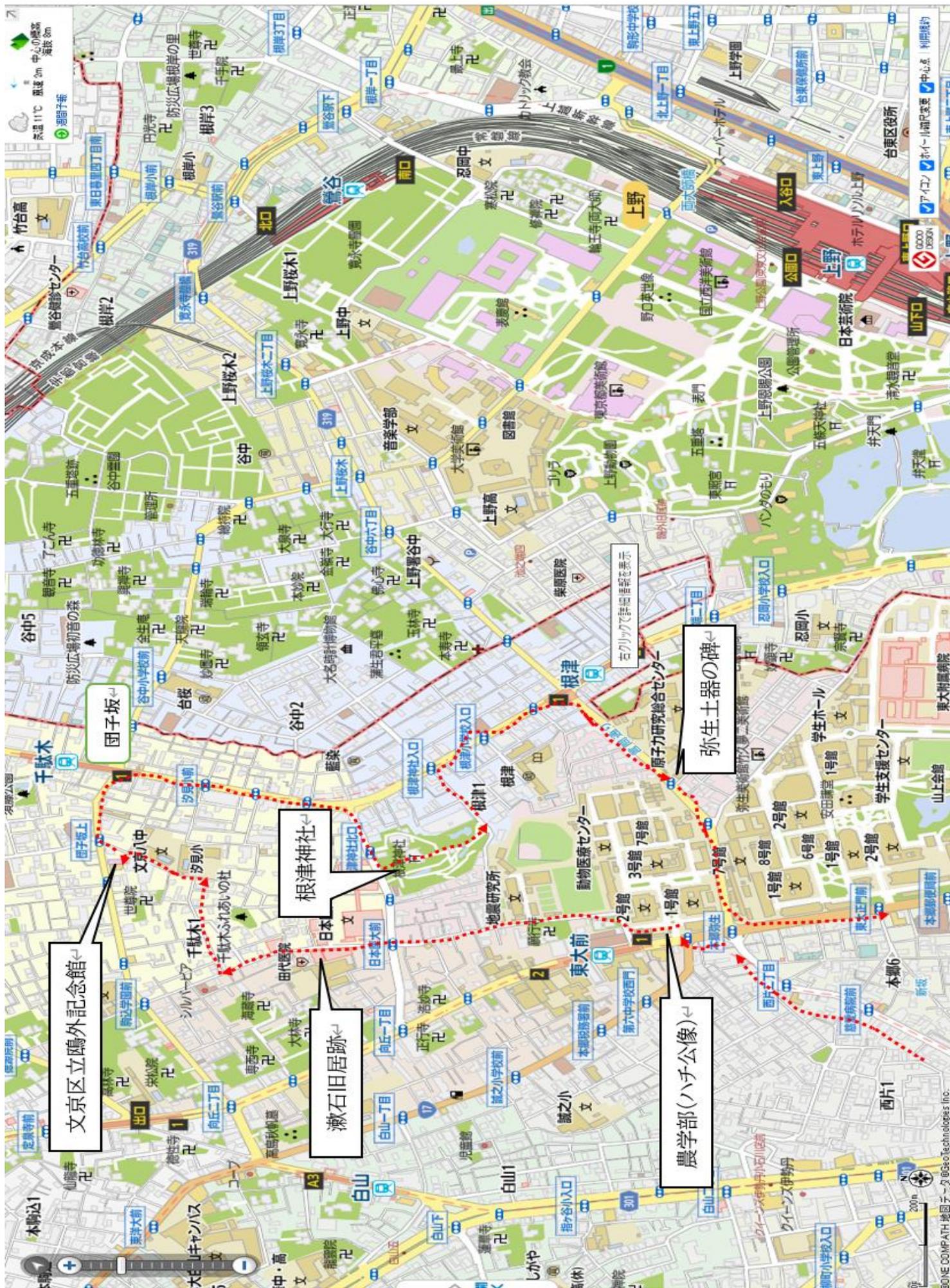
12月13日(金) JR御茶ノ水駅・聖橋口改札 10:00 集合

コース・・・JR 御茶ノ水駅⇒昌平坂学問所跡/湯島聖堂⇒本郷給水所公苑⇒文京ふるさと歴史館 ⇒逍遙・子規旧居(常磐会)跡⇒樋口一葉/金田一京助旧居跡⇒旧伊勢屋質店⇒東大農学部(ハチ公像)【昼食】⇒漱石旧居跡⇒鷗外旧居跡⇒根津神社⇒弥生土器の碑⇒東大(三四郎池)⇒旧岩崎邸⇒JR 上野駅 (約12km)

昼食・・・レストラン「東大亭」にて  
連絡先:tamaoaruku@gmail.com

申込締切・・・12月10日  
延期の場合は・・・12月/8(金)





文京区立鴨外記念館←

団子坂←

根津神社←

漱石旧居跡←

弥生土器の碑←

農学部(ハチ公像)←

原子力研究総合センター←

## はじめに

1868年、幕藩体制が瓦解し、全く新しい世の中が産声を上げました。すなわち外に向かって扉を開き、世界の学問・文明を取り入れていくという、国の新たな体制が歩き始めたのです。

新政府は、列強の植民地になることを恐れ、殖産興業、富国強兵の国づくりに向かって、大急ぎで欧米の学問・文明を受容する仕組みを作らねばなりませんでした。またその仕組みは、受容と同時に下部（地方、下級学校）にそれを配る、という配電盤の役目を果たすものでもありました。

そのためにまず、多数の外国人教師（お雇い外国人）を入れ、日本の優秀な若者をそこで学ばせた後、欧米に留学生として派遣し、やがては外国人教師と交代させる、というものでした。（なにしろ、お雇い外国人の俸給は目の玉が飛び出るほどのものでしたから）

新政府は、まずお雇い外国人の宿舎を加賀藩の屋敷跡に造りました。また、湯島の旧幕府最高学府、昌平坂学問所、開成所、医学所等を接收し、1877（明治10）年に「大学校」を設立しました。法・理・文の3学部と、旧東京医学校を改組した医学部を設置し、更に東京大学予備門（後の第一高等学校）を付属した陣容で、これらは順次、本郷の広大な加賀藩屋敷跡へ移転して、今日の東京大学へと繋がります。



まことに小さな国の黎明期に、優秀な若者たちが「坂の上の雲」を目指して峠道を登っていくべく、志を持ってこの本郷の地に集まってきました。そして外国人教師が自国語で行う講義を聞き、初めて目にする西洋の学問と文化に触れ、一日も早く西洋の水準に追いつこうと勉学に取り組み、その後順次西洋文明国へ留学して学問・文明を吸収していきます。

その中には、文京区ゆかりの人たちとして、夏目漱石、森鷗外、坪内逍遙、寺田虎彦、永井荷風、二葉亭四迷、金田一京助などがいました。また、大学で学んだ人たちとは異にしますが、樋口一葉、石川啄木、正岡子規なども、日本文学に大きな足跡を残した人々でした。

今回はこの中で、逍遙、子規が学生時代を送った「常盤会」跡地、一葉旧居跡とゆかりの質屋、漱石旧居跡、鷗外記念館等を尋ねて、生まれたばかりの国を担っていく人々の面影を偲び、また学問・文明の分電盤であった東京大学に立寄ることで、「開化期のおもかげ」を追いかけてたいと思います。

（この項は『街道をゆく・本郷界限』司馬遼太郎を参考にして作成）

## 立寄りどころ

### ○昌平坂学問所跡/湯島聖堂

始まりは、1632(寛永9)年の林羅山が開いた私塾。1797(寛政9)年、江戸幕府直轄の昌平坂学問所(昌平黌)として発足しました。

明治5年、東京師範学校、同7年、東京女子師範学校を設置、それぞれ東京教育大学(現・筑波大学)、お茶の水女子大学の前身となり、明治10年には東京大学の前身である「大学校」が設立されました。

なお、湯島聖堂は孔子廟で、現在の建物は1935年の鉄筋コンクリート造りです。



### ○本郷給水所公苑 (水道歴史館：無料)

水道歴史館を併設した公園。江戸時代から現代に至る400年の技術、設備に関わる展示を公開。

屋上には神田上水の石樋が発掘・復原されており、当時の面影を今に見ることが出来ます。

なお、東京の近代水道の発祥は1898(明治31)年、神田・日本橋方面に通水したのを始めとして、順次区域を拡大し、1911(明治44)年に全面的に完成しました。



### ○文京ふるさと歴史館 (65歳以上：無料)

文京区では、明治時代に東京大学をはじめとする多くの学校がつくられ、さらに森鷗外や樋口一葉など著名な文人たちが活動の拠点とし、文教のまちの礎を築きました。

### ○逍遙/子規の「常盤会」跡

常盤会は逍遙、子規が相前後して居住した寄宿舎です。

逍遙は尾張藩の下級武士の子で17歳の時開成学校(東大の前身)に入学、この寄宿舎に入り、なおかつで受験生を預かり教えました。早稲田大学の演劇研究の学祖と言われ、明治初めの文芸に大きな影響を残しました。

そののち、子規は明治17年大学予備門に入学し、松山藩主が買い取った常盤会に給費生として入りました。このころ漱石と知り合ったのです。子規は病床にありながら俳句・短歌を革新し際立った足跡を残しましたが、脊髄カリエスのため、わずか35歳で世を去りました。



## ○一葉/京助旧居跡

凜とした容貌の一葉は明治5年生まれ。父は甲州農民ながら八丁堀同心の株を買ったものの3か月後に幕府が瓦解。更に戸主である兄の死、続く父親の死によって生活は苦しく、死ぬまで貧困から逃れることが出来ませんでした。

この場所で一葉は母、妹を抱え、一家の責任者として、洗い張りや針仕事で暮らしを立てていました。当然貧乏のどん底で、近くの伊勢屋質店に着物などを持ち込む生活でした。明治29年、結核のため短い人生を終えました。享年24。

なお、金田一京助は一葉旧居前の坂の上に住んでいました。東京帝大文科大学言語学科卒業、アイヌ語研究をライフワークとし、アイヌ叙事詩「ユーカラ」を紹介し、また『辞海』『新選国語辞典』などの辞典の編纂等、多くの仕事を成し遂げました。



## ○旧伊勢屋質店

一葉が通ったという質屋。蔵や店、座敷を有する明治の建築です。現在の所有者は跡見学園女子大学。金、土、日に一般公開(無料)。一葉の死に際し、香典を渡したといわれています。



○東大農学部  
(ハチ公像)  
ここで昼食

## ○漱石旧居跡

36歳の漱石は、英国留学から帰国した後、一時この場所の借家に住み、小泉八雲の後任として一高と東大の講師を務め、また『吾輩は猫である』を書きました。「落雲館中学」の郁文館はすぐ隣です。この家には漱石の前、鷗外も住んでいました。

漱石は、1867(慶応3)年牛込馬場下横町で数代前から続く名主のもとに生まれましたが、生後4ヶ月で四谷の古道具屋(八百屋とも)に里子に出され、更に1歳の時に父親の友人であった塩原家に養子に出され、9歳の時に塩原夫妻が離婚、生家へ戻るが、実父と養父の対立により夏目家への復籍は21歳まで遅れました。



## ○鷗外旧居跡（森鷗外記念館：300円）

鷗外が亡くなる1922年までの30年間で過ごし、『青年』『雁』等の名作が書かれました。

鷗外は1862(文久2)年、代々津和野藩の典医を務める森家の長男として生まれ、10歳のとき父と共に上京し、ドイツ語を学び東京大学予科に最年少で入学、医学を学び、卒業後軍医となりました。1884(明治17)年からは、ドイツへ留学し、1907(明治40)年には陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任しました。



○根津神社・・・今回のテーマと関係ありませんが、ここで休憩します。

## ○弥生土器ゆかりの碑

1884(明治17)年、東京大学の坪井正五郎、白井光太郎と有坂紹蔵の3人は、根津の谷に面した貝塚から赤焼きの壺を発見しました。

後に縄文式土器と異なるものと認められ、発見地の地名を取り「弥生式土器」と名付けられました。都心部における弥生時代の、数少ない貝塚を伴う遺跡として重要であることが評価され、1976(昭和51年)に「弥生二丁目遺跡」として国の史跡に指定されました。



## ○東大（赤門/三四郎池）

正式には、加賀藩の庭園「育徳園心字池」。通称は漱石の小説『三四郎』から。これが書かれた明治40年ごろ、東京は文明開化が進み、新しい文化、新しい人々に変わっていたのでしょうか。上京した三四郎は、それに圧倒され途惑いながら成長していきます。

池畔には明治と同じ風が吹いています。



## ○旧岩崎邸

この屋敷は三菱の創設者である岩崎家の旧宅。洋館と和館を併設する典型的な明治期の大邸宅で、大広間以外はコンドルの設計。1896年(明治29年)完成。

なお、岩崎弥太郎は極貧の中から身を起こした明治の傑物でした。(詳しくは「文京区ゆかりの人々」参照)



### 夏目漱石 (1867-1916) 本名 夏目金之助

明治 17 年、小石川植物園下の新福寺の 2 階に、牛込の自宅を離れ友人と住み、大学予備門に入学。東京大学英文科卒業後、東京高等師範学校の講師となり、小石川伝通院のそばの法蔵院に間借りした。この場所から『坊ちゃん』の舞台である松山中学へ赴任した。

明治 33 年、英語研究のためイギリスへ 2 年間留学。その後千駄木に住み、小泉八雲の後任として東京大学英文科の講師となる。なお、処女作である『吾輩は猫である』は千駄木で書かれたもの。代表作『吾輩は猫である』『草枕』『坊ちゃん』『三四郎』『野分』『虞美人草』等



### 森鷗外 (1862-1922) 本名 森林太郎

明治 6 年、11 歳で東京医学校予科に入学。学校があった本郷の加賀屋敷跡の寄宿舎に入る。東京大学医学部を卒業後、4 年間ドイツへ留学。

帰国後は軍医の傍ら、翻訳・小説・戯曲・評論等を発表し、明治・大正時代を代表する文人として活躍。

千駄木団子坂上にあった「観潮楼」には 1892 年から 1922 年に 60 歳で亡くなるまで暮らした。代表作：『阿部一族』『青年』『山椒大夫』『雁』『高瀬舟』等



### 樋口一葉 (1872-1896) 本名：樋口奈津

24 年間の短い生涯のうち文京区内在住期間は約 10 年余。

明治 9 年、4 歳の時から 5 年間に過ぎたのは東京大学赤門前(法真寺東隣)。下谷時代(現台東区)には、14 歳で小石川の安藤坂の歌塾萩の舎(はぎのや)に入門、和歌と古典の勉強に励んだ。

父の病死で若くして戸主になった一葉は、半井桃水に師事し、小説家を志す。

その後、下谷竜泉寺に移るが再び戻り、亡くなるまでの 2 年 6 か月間に名作を書き、24 歳 8 か月の若さで亡くなった。代表作：『大つごもり』『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』等



### 岩崎弥太郎 (1835-1885)

三菱財閥の創始者。父は地下浪人。高知藩に職を得、開成館長崎出張所に勤務し貿易に従事、1869(明治 2)年には同藩大阪商会に転じた。

廃藩置県に際し藩の事業を引き継ぎ、九十九商会をおこし、後に社名を三菱商会、郵便汽船三菱会社へと改称した。台湾出兵の軍事輸送、西南戦争の軍事輸送を担当。さらに、鉱山・造船・金融・貿易など多方面への進出も試みた。

新汽船会社共同運輸が設立されると激しい競争が続いたが、弥太郎は競争渦中の 18 年に病死し、その事業は弟弥之助、長男久弥に継承された。



(この項(岩崎弥太郎を除く)は web サイト:「文豪のまち文京区」(文京区観光協会)から転記しました)